



起上り小法師の由来

「だるま」は、禅宗の達磨大師の坐禅姿を模した置物、玩具です。白河だるまは、京から伝えられたもので、眉毛は鶴、髭は亀、耳髭は松と梅、あご髭は竹を表し、目の部分は、何らかの願いを行い、祈願が叶うと目を書き入れるものです。赤色は、厄除けと家内安全のご利益、白色は開運を表します。

「起上り小法師」は、織田信長の家来、蒲生氏郷が岐阜から伝えたものです。信長は、岐阜城を七回攻めて失敗し、八回目の永禄十年（一五六七）ようやく攻略できました。その時、信長は「我、正に起き上り最中也」との言葉を述べたとされ、それが「七転び八起」の由来です。氏郷は、願いは必ず叶うということをは、「赤色の達磨」たるまに例え、当時キリシタンも多くいたことから、修験者や宣教師を法師と呼ばれていたことから「小法師」としました。赤色は達磨、白は開運を表します。黄色や水色はありませんでした。家族が増えるようにと家族数より一個多く買います。

起上り小法師と蒲生氏郷

石田明夫

小田原攻めと会津入り

関東を支配していた北条氏政は、約八万二千で小田原城に籠城していたが、天正十八年（一五九〇）三月二十九日、豊臣秀吉連合軍約二十一万五千人に包囲されます。六月二十三日には、五千人会津までの道を伊達政宗に命じ、幅三間（五・四）で北条氏照が守る八王子城を前田利家・上杉景勝ら一万五千人が攻め一日で落城させます。七月五日には、氏政の子氏直が降伏。七日、結城朝晴が小山城を攻略。九日、徳川家康が小田原城に入り、十一日には、氏政・氏照親子が切腹し北条氏は滅亡しました。十二日、秀吉は、小田原城に入り、氏直を高野山へ隠居させます。そして、秀吉は、奥羽仕置のために会津行きを命を發します。十三日、関八州を家康へ与えます。十三日、秀吉は鎌倉に入り、十九日には鎌倉を出すも落城せず、秀吉が近くを通ることから、八月二日浅野長政の意見により撤退して退します。

七月二十三日、家康は江戸に入ります。七月二十六日から八月四日まで、秀吉は宇都宮城にいて奥羽の領主を迎え、参内しなかつた者は領地没収としました。八月五日、秀吉は栃木県の大田原城に宿泊、六日、白河城に宿泊します。

秀吉は、関東の道を水戸の佐竹義宣、白河からメートルで整備させ、後に奥州街道となります。政宗は、『伊達治家記録』五月九日、黒川城（現若松城）を出発、六月五日小田原に到着しました

が、秀吉から底倉に押し込められます。六月九日に秀吉と会い、一〇日に宮城県への置ききを命じられ、会津は取り上げられます。二十五日、黒川城へ戻り、七月中旬には米沢城へ去ります。つた。六月五日、須賀川の矢田野氏が天栄村の大里城に約五百人で籠城、政宗は約一万の大軍で攻撃をするも落城せず、秀吉が近くを通ることから、八月二日浅野長政の意見により撤退して退します。



籠城戦の逸話に、落城しないことを知った政宗は、矢田野氏が稲荷神社に祈願している事を知り、落ちない神社として宮城県に移したのが竹駒稲荷神社です。



籠城していた矢田野安房は、大里城に火をかけ城を退き、常陸国の佐竹義宣を頼ります。後に、義宣の弟、元会津領主葦名勝重（義広改名）に付いて秋田県角館へ移り、二階堂（改姓し、今も二階堂家の武家屋敷があるのです。

史跡 太閤道

「太閤道」

須賀川市長沼町の勢至堂道の旧道や会津若松市湊町の背炙峠に残されています。幅は、三間で造られています。ただし、秀吉が馬に乗り換えたと瀨炙峠は、幅が一間しかないところもあります。

蒲生氏郷の家臣掌握

1. 家臣を大切に、論功行賞で、領地がなくなるほどで、最後には苗字をくれた。
2. おべんちゃらは嫌いで、玉川という弁舌のたけた家臣は、おべんちゃらを使うため、自分の考えがないとして解雇。
3. 常に家臣団の先頭にいた。

主将自らその場に至りて、掛かれと思ふ所には、主将自らその場に至りて、ここへ来れと言え、主将を見捨てる者はあらざるなり、大將が早く討ち取られたほうが大負けである。秀吉の言4. 茶道に理解があった。利休七哲の筆頭人の話をよく聞いた。

5. 月一回会議をし、会議では怒らず、怒らずを基本に自由な発言をさせた。6. 氏郷は新規に家来を召抱えると、一緒に風呂に入り、わが旗本には銀の鯉尾の兜をつけ、つねに先陣に進む者がいる。しかし、お前は、必ずやその者に負けるでないぞ。それは氏郷

6. 常に中央にいれば天下に近いと思っていた。家康はその逆であった。

7. 情けがあり、伊達政宗が十六歳の清十郎を刺客を送り込み、それは忠臣として許し放す。

豊臣秀吉は、小峯(白河城)に八月六日に入ります。七日、長沼城の御座所に入りました。長沼の伝承では、長沼城主であった新国貞通が、小峯城まで迎えに行き、日暮れには長沼に到着したという。城中の巽(南東)に位置する御座所となった楽永閣で城下の婦女子数百人を呼び寄せ宴会をしたという。『百事雑考』には、秀吉に呼ばれた貞通は、親しく話をしたが、余りにも方言がひどく言が通じなかつたので返つて秀吉の機嫌を損じたという。

翌八日、長沼城を出発した秀吉一行。騎乗者だけで約三千人、先頭が勢至堂峠に指しかかっても、最後はまだ城中に居たという。伝承に、勢至堂の関守新八郎が、駕籠の前に柏葉で包んだ餅と山菜を差し出したところ、秀吉からこれは如何な趣の物じゃと言われ、新八郎は「柏餅にござります」と答え、秀吉は喜び、新八郎に柏木の姓を名乗拝領したという。

また、蒲生氏郷の宿となつた上江花では、村人が芳い、柏や朴の葉で包んだ赤飯と白湯を出し接待。感激した氏郷は、帰りに金子を与えたという。一大行事を忘れないよう村では、毎年雷神様に集まり、まま(飯)炊き祭り(太閤祭り)をしています。『勢至堂村古来よりの由緒書』には、柏木隼人は、白川城主結城義親の家来で、先祖は佐竹氏といい、秀吉が勢至堂峠に来た時、村人は恐れを成して奥山に逃げ隠れたという。また、隼人は、接待のため杉葉を敷き、その上で赤飯を差し上げたとあります。

勢至堂峠の旧街道は、「太閤道」と呼ばれ、その日は、湖南町御代と福良に分かれて宿泊しました

が、秀吉は、当時湖南で最も大きな集落だった福良に宿泊したとみられます。

九日、秀吉は、黒森峠の九折に悩み湊町原に着きます。伝承では、背中炙峠入口にあつた肝煎の坂内家で、長い曲がりくねつた山道に備え、駕籠から降りて身支度をし馬に乗り換えたという。その場所が、背炙峠東側入口の坂内家旧跡の「太閤桜」です。そして、東山町天寧の天寧寺(当時は輪王寺)で再度着替え、総勢約五万人が黒川城下に入りました。

『淺野家文書』には、九日、興徳寺を御座所と評定所に充てる。秀吉は、会津を初めは細川越中守忠興に与えようとしたが、忠興は固辞し蒲生氏郷に与えられます。『会津四家合考』に氏郷は、会津の拜命を断つたが、訳あつて秀吉や家康に勘当されていた佐久間久右衛門尉ら四人が許されることのできた。

十日黒川城に入り、十三日黒川を出発します。『会津四家合考』に秀吉は、氏郷と木村吉清(福島城)の手を握り、奥州の非常に備えよと言ひ残したが、氏郷は不本意のため涙したという。十三日大内を経て田島に宿泊しました。『会津旧事雑考』十四日、会津領を離れ、経路を高原にとり、険難なことから駕籠から下りた場所が「太閤下ろし」といい、鬼怒川に「太閤下しの滝」がある。

『元湯古絵図』に「御太閤様御入湯」とあることから、元湯から高原を越えて、日光、そして京都へ戻つた。秀吉の年齢は五十五歳でした。